



慶應義塾大学ビジネス・スクール

瀬名知良 (B)

— 『起業家精神』と『リーダーシップ』の行方 —

第1章 1年後

<教育の仕事>

株式会社イークエストの事業の整理から1年程経ったある日、瀬名が自宅のソファの上で本を読んでいると、携帯が鳴った。着信の画面には、面識のあった、ある経営大学院（MBA）の教授の名前が表示されていた。

昨年からの事情を、瀬名から聞いた教授は言った。

「そうでしたか。要するに、今は『充電中』ということですね。では来年度から、今までの経験をこちらの経営大学院（MBA）で教えてくれないですか。教授会の承認を得る必要がありますが、以前、講座をやって頂いたこともありますよね。ですので、大丈夫だと思いますよ。」

起業家として、会社設立やベンチャー企業経営の実際、魅力や楽しさ、難しさや苦勞など、起業してみても初めて見える景色を、MBA 学生に教えて欲しいとのことであった。

経営大学院はエリートの行くところというイメージを持っていた瀬名は、修士学位も無い自分が役に立てるのだろうか、と思った。しかし、事業を整理してからのこの1年、起業の成功や失敗の体験を、様々な経営学者の理論やフレームワークに重ねながら内省するうち、瀬名の心に、起業を目指す人へ伝えたいことが多く生まれていたのは確かだった。瀬名は教授に、「僕でお役に立てるのであれば、喜んで」と返事をした。

本ケースは実在の起業家から情報を得て作成した。本文中の人物名、会社名は仮名である。記載内容について起業家本人から了承を得ている。作成したのは高木晴夫、鶴ヶ谷理子、市村真納である。

本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクール（〒223-8526 神奈川県横浜市港北区日吉4丁目1番1号、電話 045-564-2444、e-mail: case@kbs.keio.ac.jp）。また、注文は <http://www.kbs.keio.ac.jp/> へ。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、いかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またいかなる方法（電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない）による伝送も、これを禁ずる。

Copyright © 高木晴夫、鶴ヶ谷理子、市村真納（2018年4月作成）

翌年、経営大学院で授業をするようになると、瀬名は様々な年齢、経歴の学生に出会った。大企業に就職し、素晴らしい実績をあげながらも、自身のキャリアを見つめなおすために休職して入学した人。短大卒業後に身一つで渡米し、様々な困難を乗り越えてIT企業で働き、帰国して学生になった人。その経歴からは大きな悩みなどないように見える人であっても、それぞれの人生で試行錯誤しており、
5 今後のためにここで学びたいと思っているのだった。こんな人々に対し、自分のこれまでの経験が少しでも役立つと思うと、瀬名は嬉しかった。

<アランとの再会>

10 MBA で教え始めた翌年の春、瀬名はある勉強会で久しぶりに知人のアランと再会した。10年前、瀬名が株式会社イースコープを創業した頃に友人を介して知り合った、ベンチャー投資事業を行う「株式会社イーベロシティ」の創業者である。

15 勉強会後の懇親会で互いの近況報告を終えると、アランは瀬名に「当社の事業を手伝ってもらえないか」と持ちかけてきた。株式会社イーベロシティでは、しばらく休業していた東京でのベンチャー投資活動を昨年再開したが、あまりうまく進行していないらしい。「当社の周囲に、面白いベンチャーが集まるような仕組みを作りたい、インキュベーション事業を盛り上げてほしい」という話だった。彼の熱意に説得され、瀬名は週3回の業務委託という形でイーベロシティの仕事を手伝うようになった。

20 起業家のコミュニティを分析して成功要因を理解した瀬名は、起業家向けの新しいイベントをスタートさせることにした。これは、様々な出身国のゲストによる講演やパネルディスカッション、さらにシリコンバレーやNYC、ロンドン、ベルリン、東京など世界各都市で開催するピッチコンテストを含むものであった。瀬名が目論見が当たり、イベントは年を重ねるごとに盛況となり、多くの将来性豊かな起業家が集い、学びや交流を深める場となっていった。

25 瀬名がイーベロシティに関わるようになった翌年、ベンチャー投資育成事業にコミットする会社が必要であるという経営陣の判断により、会社分割のかたちで「株式会社グローバルビジョン」が設立された。代表取締役社長に就任することになった瀬名は、少額ながら出資を希望した。それは創業者の一部に加えてもらい、当事者意識をもって経営に取り組みたかったからだった。

30

＜投資側の仕事＞

「株式会社グローバルビジョン」の経営者となった瀬名の仕事は、これまでのような自身の起業とは異なる、他の起業家への投資・育成だった。起業家というアイデンティティに拘りのあった瀬名は、「投資側」の仕事に回ることに抵抗感があつたが、徐々に創業期・シード期の歩み始めたばかりの起業家と関わる仕事が好きになっていった。自分の能力や経験を活かしながら、国内のみならず、世界中の優秀で熱意ある人々と出会い、彼らの事業に投資をし、発展を支援して、社会に新しい価値を生み出すことに貢献できる。瀬名は、国内外を繋いでグローバルなネットワークを構築し、起業家の成長を応援する立場になったのだった。

第2章 新しい「人生の目的」

＜瀬名氏インタビュー「日本の産業構造を Redesign する！」＞

ここ数年、僕は国内外のシード・アーリーステージのスタートアップに投資をしたり、日本だけでなく、海外でピッチイベントを開催するという仕事をしてきました。世の中の定義としては、VCであったり、アクセラレーターということになります。でも、僕のメンタリティとしては、今も「起業家」のままです。但し、僕は自分でコードを書けるわけでもないし、技術的なバックグラウンドを持っているわけでもありません。また、若い人たちと較べたら、新しい技術に対する吸収力が劣るのは言うまでもありません。でも、何かを生み出したいという欲求は益々強くなっています。また、性格的には、ひとつの事業を成長させていくというよりも、世の中のインフラを創りたいという想いがあります。起業家が生まれ、イノベーションが誘発される環境を創り、日本の国際競争力を高めること、次世代に魅力ある日本を継承していくことに、甚だ微力ながら貢献したいと思っています。

何を究極的な成功と感じるか、それは人それぞれだと思います。自身にとっての成功を、他者ではなく自分自身で定義し、それに挑戦する。それこそが、起業家の本質ではないでしょうか。

昨年、起業を目指す日本の若者を、シリコンバレーのエコシステムを学ぶ研修ツアーに引率したことがありました。最終日にピッチコンテストを設け、参加者たちは英語でのプレゼンにチャレンジしたのですが、その様子を会場の隅で見ていた僕は「みんな慣れない英語で頑張っているな。」と思った後、ふと自分の親世代のことを考えました。

戦後1ドル360円の時代に、片道切符でアメリカ市場を開拓し、日本発の世界トップブランドになったソニーやホンダ、トヨタや松下電器の方々の苦勞に比べたら、起業にせよ、グローバル展開にせよ、

僕たちの世代は極めて恵まれていると思います。

僕は昭和の高度経済成長期の恩恵に浴している世代です。このままでは、親世代から受け取るだけ受け取って、子供の世代には何も残さずに終わってしまう。

5 高齢化、人口減少が見込まれ、公的債務は GDP の 2 倍以上という日本社会を再生するには、「機能しなくなったものを破棄し、新しいものを創造する」ことが必要不可欠です。自分自身のタグボートの適性やこれまでの起業経験、グローバルなネットワークを最大限活かして、東京を Global なスタートアップハブにし、日本の産業構造を Redesign することに貢献したいと思います。荒唐無稽に聞こえるかもしれないし、勿論、僕一人でどうこうできることではありませんが、Japan 2.0 を実現することに挑戦していきたいと思います。

10

15

20

25

30

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

不 許 複 製

慶應義塾大学ビジネス・スクール
